



Title	依頼場面におけるほのめかし表現の研究
Author(s)	頼, 俊雯
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92785
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 頼 俊 雯 ）

論文題名

依頼場面におけるほのめかし表現の研究

論文内容の要旨

本研究は依頼場面におけるほのめかし表現を対象とし、特にテレビドラマや映画における会話のデータを基に、日本語と中国語のほのめかし表現の言語形式及び内容を分析することを通して、両言語の共通点と相違点を明らかにするものである。本研究は次の二つの目的を設定した。

一つ目の目的は、明示的依頼文とほのめかし表現との間にどのような関係があるのか、ほのめかし表現にはどのようなものがあるのかを解明することである。二つ目の目的は、ほのめかし表現の推論過程を解明することである。

序論では、本研究の背景、本研究の目的、本研究がほのめかし表現を取り上げる理由、本研究の対象を依頼場面に限定する理由、また、本研究が日本語と中国語を対照し考察する理由について述べた。第二章では、依頼及びほのめかしに関する先行研究を概観しその問題点を確認した。日本語のほのめかし表現に関する先行研究は、主に二つに分けられる。一つは依頼表現の種類の一つとして分類し、ほのめかし表現の例を挙げている研究である。もう一つは、ほのめかし・ストラテジーの分析や、ほのめかし表現が用いられる動機付けと使用効果についての議論である。一方、中国語におけるほのめかし表現に関する研究は少なく、それらの研究では、中国語のほのめかし表現は失礼な言い方であると指摘されている。また、言語形式と内容の面からほのめかしによる依頼を考察した研究は見当たらず、日本語と中国語におけるほのめかし表現の特徴及びその類似点や相違点についても解明されていない。第三章では、本研究が取り入れる理論的枠組みについて概説した。本研究では、Searle (1979) 「言語行為理論」、Grice (1975) 「協調の原理理論」、Sperber & Wilson (1995) 「関連性理論」を援用しつつ、考察を行った。

第四章では、依頼場面における日本語のほのめかし表現と明示的依頼文との関係について考察した。日本語の明示的依頼文においては、話し手の希望に関して（「希望＋依頼」、「希望＋希望を満たすことができない＋依頼」、「希望＋希望の理由＋依頼」）言及するものが最も多く見られる。そして、日本語のほのめかし表現の内容を分析した結果、ほのめかし表現の内容の多くが「①話し手自身の希望・欲求について」と、「②話し手の希望を満たすことができないこと」に当てはまることが明らかになった。即ち、日本語の明示的依頼文に多く言及される話し手の希望は、ほのめかし表現においても最も多く言及されている。それゆえ、依頼場面におけるほのめかし表現は依頼の意図を伝えるために、明示的依頼文における「情報提供」を利用している。話し手の希望をめぐる語ることではほのめかしていることが明らかになった。つまり、ほのめかしによる依頼の場合、依頼表現が明言されないため、話し手の希望を情報提供という形で明言することによって、依頼という意図が伝達されやすくなるよう試みている。

第五章ではSperber & Wilson (1995) の関連性理論の観点から、ほのめかし表現の伝達の仕組み及び解釈過程を解明した。まず、本章の冒頭では依頼表現でいう「希望」とほのめかし表現になりうる「希望」を区別している。依頼表現でいう＜話し手の希望＞は、話し手は聞き手によるある行為の実施を希望し、その行為に明示的に言及する。一方、ほのめかし表現における＜話し手の希望＞は、「話し手は希望を抱いている」ということであり、その希望の内容は依頼で言及する行為ではない。そのため本研究は、依頼表現における話し手の希望は依頼そのものであるが、ほのめかし表現において話し手の希望と依頼の内容は別物であり、ほのめかし表現で述べた「希望」を叶える手段として依頼を行うと提案した。

5.1節では、ほのめかしによる依頼場面において、「話し手の希望を満たすことができない」ことが伝達されることで依頼という発話意図にたどり着くプロセスを考察した。話し手の希望を満たすことができないということは、話し手にとって望ましくない状況である。話し手が望ましくない状況を聞き手に向かって発言するということ

は、聞き手に望ましくない状況を改善させようと考え、聞き手にある行為を実行してほしいという依頼をほのめかすことに繋がる。

そして、5.2節では、「話し手の希望・欲求」が伝達されることで依頼という発話意図にたどり着くプロセスを考察した。＜話し手の希望＞を聞き手に向かって発言するということは、話し手の希望が満たされておらず、話し手は聞き手にその希望を叶えてほしいという依頼をほのめかすことに繋がる。そして、＜話し手の希望＞から発話意図（依頼）に到達するには、「話し手のある希望を満たすことができない」という望ましくない状況を推論する必要がある。即ち、「話し手の希望 → 話し手のある希望を満たすことができない →（依頼）」という推論が行われることが明らかになった。また、＜話し手の希望の理由・背景＞に言及することで依頼をほのめかす例も見られる。「話し手の希望の理由・背景 → 話し手の希望 → 希望を満たすことができない →（依頼）」という過程で推論が行われる。

本研究では、ほのめかしによる依頼の伝達の仕組みは次のようになると提案する：【話し手は何らかのことを希望しているが、現実には何らかの原因でその希望を満たすことができないという望ましくない状況に置かれている。そこで聞き手の行為によって話し手の希望を満たすことが可能であると想定し、聞き手に対して、話し手が希望を満たすことを可能にする行為を行なってくださいとほのめかす。】話し手の希望を「P希望」とし、希望を満たすことができないことを「Q不可」とし、希望や希望を満たすことができない理由を「Z理由」とし、発話意図である依頼文を「R」とすると、依頼場面におけるほのめかし表現の伝達の仕組みは「Z理由、P希望、Q不可、(R)」と示すことができる。

第六章では、言語形式の面からほのめかし表現と明示的依頼文との関係を解明することで、依頼場面におけるほのめかしの特徴を明らかにした。また、ほのめかし表現の言語形式上の特徴について考察し、ほのめかし表現の言語形式はどのような機能を働くのかを明らかにした。明示的依頼文において、依頼表現が言語化されない場合、情報提供がほのめかし表現として機能しうることが明らかになった。即ち、依頼場面におけるほのめかし表現は、明示的依頼文（「情報提供＋依頼表現」という形をとる場合）における「情報提供」と同じ形式であると言える。言語構造上、ほのめかし表現と明示的依頼文との関係を図で示すと、「『M (+N) +R』（M：情報提供、N：追加要素）」であり、ほのめかし表現「O」が情報提供「M」に復元する際に、追加要素（情報提供）「N」が必要な場合がある。また、ほのめかし表現には従属節で言い終わる不完全な文、つまり「言い残し文」と、「言い切り」の形が見られる。「言い残し文」には、「カラ文」によるほのめかし表現、「ンダケド文」によるほのめかし表現、「テ形」によるほのめかし表現が見られる。また、「言い切り」の形であるほのめかし表現には、擬似独話と否定疑問文が見られる。

第七章では、日本語との対照的観点から、中国語の明示的依頼文とほのめかし表現について考察した。日本語と中国語における依頼表現と情報提供の提示順の違いがほのめかし表現の使用に影響を与えるのかについて分析した。日本語では「情報提供＋依頼表現」という順番をとる場合が多いため、前半の「情報提供」で発話を中断し、後半の「依頼表現」を言わずに発話を終えると、「情報提供」の部分がほのめかし表現になると解釈することができる。一方、中国語では「依頼表現」を述べた後で「情報提供」を加えるのが一般的である。そのため中国語では依頼する際、最初から依頼表現を使用し、「情報提供」を行うことでほのめかす方法は一般的には取られないと考えられる。そのため、日本語と中国語の明示な依頼行動において、情報提供が依頼表現の前後に提示されることで、ほのめかし表現の使用（の多寡）に関係があると結論づけた。また、日本語と中国語の明示的依頼文との比較を通じてそのほのめかし表現の特徴について考察した。日本語において、ほのめかしによる依頼は聞き手の好意に頼る行為であると明らかになった。一方、中国語においてほのめかし表現を用いた依頼は、話し手には正当な理由がある、あるいは聞き手には依頼された行為を行うべき正当な理由があるから、聞き手の好意に関係なく当然聞き手がある行為を行うべきだと述べることでであると解明した。ここに、日本語と中国語のほのめかし表現には大きな相違点が見られる。

本研究は、明示的依頼文とほのめかし表現との間の関係、及びほのめかし表現にはどのようなものがあるのかについて考察した。また、日中対照の観点から、日本語と中国語のほのめかし表現の特徴の類似点と相違点を解明した。そして、依頼場面におけるほのめかし表現はどのように解釈されるのか、ほのめかし表現の伝達の仕組みはどのようなになっているのかを明らかにした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (頼 俊 雯)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授
	副 査	教 授
	副 査	教 授
	副 査	准教授
	副 査	准教授
		岸田 泰浩
		荘司 育子
		古川 裕
		山川 太
		大和 祐子

論文審査の結果の要旨

依頼に際しては、相手に依頼内容を具体的に伝えるのが通常であるが、時折、その意図を暗示的に伝える、つまり、依頼であることや依頼内容に言及せずに、それをほのめかすことで依頼を伝えようとすることがある。審査対象論文は、そのような「ほのめかし表現」を研究対象として取り上げ、明示的な依頼表現と比較しながら、ほのめかし表現が述べている内容やその言語形式を分析し、その伝達の仕組みの解明を試みるものである。また、日本語のほのめかし表現の分析で得た知見をもとに、中国語のほのめかし表現を考察し、両言語の類似点と相違点についても論じている。

対象論文は八つの章から構成されており、研究目的について述べた第一章に続き、第二章では、依頼及びほのめかし(off record)に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘した上で、本論文において解明を目指す課題として、①依頼場面におけるほのめかし表現の定義、②ほのめかし表現と明示的依頼文との関係、③ほのめかし表現が言及する内容および伝達の仕組みや解釈過程、④日本語と中国語のほのめかし表現の対照、の4つが挙げられている。第三章では、分析のための理論的枠組となる、Searle (1979)「言語行為理論」、Grice (1975)「協調の原理理論」、Sperber & Wilson (1995)「関連性理論」、Brown & Levinson (1987)「ポライトネス理論」について概説されている。

第四章では、まず、依頼場面におけるほのめかし表現が備える特徴、即ち、定義が示された。そして、日本語の明示的依頼文において付加的な情報を述べる際、依頼の動機になる話し手の希望やそれに関わる事柄（希望を満たせないことや希望の理由）に言及することが最も多いことをテレビドラマや映画で実際に用いられている依頼のデータに基づき実証した。そして、同じ題材から収集したほのめかし表現についても、その多くが話し手の希望やその希望が満たせないことを述べていることが分析の結果明らかとなり、依頼場面におけるほのめかし表現はその意図を伝えるために明示的な依頼とともに最も頻繁に言及される情報を利用している、即ち、話し手の希望をめぐって語ることではほのめかしていると結論づけている。

第五章では、関連性理論を用いて、ほのめかし表現の伝達の仕組み及び解釈過程の解明が試みられている。「話し手は何らかのことを希望しているが、現実には何らかの原因でその希望を満たすことができないという望ましくない状況に置かれている。そこで聞き手の行為によって話し手の希望を満たすことが可能であると想定し、聞き手に対して、話し手が希望を満たすことを可能にする行為を行なってくださいとほのめかす」という解釈過程をもとに「Z理由、P希望、Q不可、(R)」という情報提示の仕組みを提案している。これは、前章の分析結果を受けて、依頼文Rが明言されない場合、話し手の希望に関わる情報提供であるZ, P, Qのいずれか、または、その組み合わせの発言がほのめかしとして機能することを捉えたものである。

第六章では、ほのめかし表現の言語形式に焦点をあてた議論がなされている。日本語のほのめかし表現では、形式的には文が途中で終わっている「言いさし」がよく観察される。データで多く見られた、「～から。」「～んですけど。」「～て。」で終わるほのめかし表現を考察し、明示的な依頼文においても、付加的な情報が従属節として、つまり、接続助詞をとまって依頼表現に先行することがよく観察されることから、ほのめかし表現が内容のみならず、形式においても情報提供の発話と対応していることが論じられている。また、「言い切り」の形式である疑似独話や否定疑問文もほのめかしに用いられるが、ポライトネス理論や協調の原理からそれらの使用動機や依頼に至る解釈過程を解いている。

第七章では、日本語と中国語のほのめかし表現を比較している。まず、明示的依頼文において、日本語は「情報提

供→依頼表現」、中国語は「依頼表現→情報提供」の順で発話されることが多いことを明らかにした。そして、発話を中断すると、日本語では「情報提供」が残り、それがほのめかし表現になるが、中国語では中断しても結局「依頼表現」が残ることから、発話順が異なることが両言語におけるほのめかし表現の使用の多寡に関わっていると主張した。また、ほのめかし表現の内容について、日本語とは異なり、中国語では依頼（の内容）が行われるべき正当な理由が述べられることが多いことを明らかにした。さらに、中国語のほのめかし表現で、疑似独話が用いられる一方で、否定疑問文が用いられていないのは、中国語の否定疑問文は、「否定命題」の確認が主な用法で、依頼のほのめかしに繋がる「同意要求」の機能を表す場合が限られているためだと論じている。

最後の第八章は、それまでの議論をまとめるとともに、今後、考察すべき課題として、依頼場面とは異なる要求場面におけるほのめかし表現、依頼に対する断りの場面で用いられるほのめかし表現、日本語と中国語のほのめかし表現のさらなる考察と類型化、ほのめかし表現の音声的な特徴が挙げられている。

ほのめかしの存在を指摘する先行研究は少なくないが、例を挙げてほのめかしであることを述べるだけのものが多く、また、どのようにして真の意図が伝わるかという仕組みや推論過程を多くの例を用いて詳しく論じたものはあまり見当たらない。その中で、対象論文は、ほのめかし表現がいかなる内容を述べているのか、また、当該表現に頻繁に用いられる言語形式があるのかを考察するとともに、そのような内容や形式がなぜ依頼のほのめかしとして機能するのかの解明に努め、ほのめかし表現の特徴と同時に明示的依頼文との関係を簡潔に示す図式を提案した点がまず評価できる。また、ほのめかし表現の多くをテレビドラマや映画から収集しており、実証的な側面があるだけでなく、聞き手が話し手の発言内容や表現形式をヒントにして、ある行為を依頼されていると認識するに至る解釈過程を理論的な枠組みを援用して紐解こうとした意欲的な論文だと言える。さらに、中国語のほのめかし表現を収集し、日本語と対照させながら、当該表現の内容や形式にどのような類似点や相違点があるかを考察した点にも新規性を認めることができる。

一方で、問題点があることも否めない。議論は全体的に分かりやすいが、これは、分析が既定路線に沿っており、いい意味で予想外の展開が少ないことを示唆する。また、ほのめかしとして理解されにくい表現と対比させながら、分析の妥当性を検証するというような手続きを経ていないため、関連性理論などをほのめかし表現分析のための道具として援用しているというよりも、その理論の有用性を示す一つの例としてほのめかし表現が提示されているに過ぎないというような印象を与える。そして、日本語と中国語の対照研究としては、例えば、反語のような中国語独自のほのめかし表現を詳しく考察することで中国語からも新たな知見を得る可能性があるにも関わらず、日本語の分析で得た知見を中国語に単純に適用するに留まっている点が惜しまれる。

しかしながら、論証が弱い部分があるとはいえ、場面や聞き手などの文脈が異なると、伝達の意図（依頼内容）が変わったり、ほのめかしとして成立しなかったりするなど、複雑な様相を呈するほのめかし表現について、内容と形式という側面的に絞ることにより、いくつもの典型的な特徴を導き出すことに成功しており、ほのめかし表現の総合的な研究のための一つの基盤として認めることができる。

以上のことから、本審査委員会は、全員一致で対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。